

「地域子育て支援拠点研修事業」＊山梨開催＊

『本気で取り組もう!!』

拠点でつながる山梨のあったか子育て』

◆開催概要

開催日 2009年12月6日(日) 9:45～16:30

会場 かいてらす(山梨県地場産業センター)

主催 財団法人子ども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会

後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・山梨県・甲府市・笛吹市

協力 地域子育て支援拠点研修事業<山梨開催>実行委員会・NPO法人Happy Space ゆうゆうゆう

参加者 合計195名(男32名 女163名)

(行政47名、NPO任意団体67名、他団体・企業64名、その他17名)

◆開催趣旨

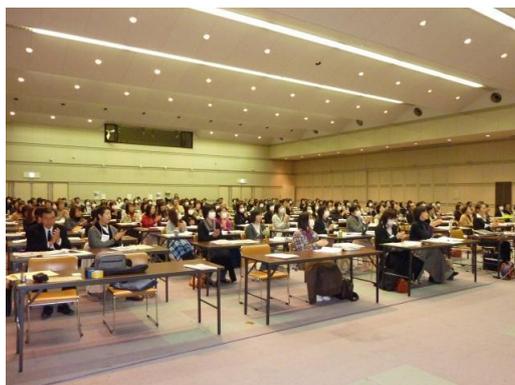
平成19年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業(ひろば型、センター型、児童館型)が新たに再編されました。そこで、行政とともに地域における子育て支援拠点間のネットワークを図りながら、地域子育て支援拠点の意義と役割を検証します。

また、拠点スタッフ一人ひとりが日頃の活動を振り返り、見識を深め、スキルアップに寄与することを目的とします。

◆プログラム趣旨

今年度は、次世代育成支援地域行動計画の後期作成の年であり、各市町村での取り組みにますます期待がかかります。19年度には県で地域ぐるみ子育て支援ネットワーク検討委員会を立ち上げた経緯もあり、拠点事業を含め、地域を巻き込んだ取り組みが求められています。

県内外の事例をもとに、本当に望まれる子育て支援とはどんなものなのか、地域で行う子育て支援の可能性とは。市民・NPOと行政が力を合わせ、山梨の地域特性を生かした子育て支援拠点事業を考えます。



◆開催挨拶・主催者挨拶



主催者挨拶
財団法人子ども未来財団
常務理事 仲山 章さん



実行委員長挨拶
NPO 法人 Happy Space ゆうゆうゆう
理事長 星合 深妃さん

●【プログラム1】【基調報告】

「地域子育て支援事業の概要と展望」

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室

朝川知昭さん

地域子育て支援拠点事業は、それぞれの特色を活かし、ひろば型、センター型、児童館型となっています。

今年度より第2種社会福祉事業となりました。

子育ては私たちひとりひとりの問題としてとらえ、地域で支え合い地域の子育て力を高め、安心して子どもを生み育てていける環境を整えていくことの大切さをお話して下さいました。親の就業に伴い、

保育所の拡大傾向にはありますが、0～2歳児の8割は在宅で子育てをしている状況で、専業主婦が孤立感、負担感を感じています。ひろばでの友人、知人からの情報収集が、とても大切で子どもにとっても同年齢の交流の場として必要とされています。子どもが小さい時に父親が関わることの重要性から育児介護休業制度を見直し、父親の子育ての充実実現へのお話もされました。



●【プログラム2】【基調講演】

トーク&ライブ「夢の種まき」

講師：京都美山高等学校 校長 大野 実さん

顔の見える校長、歌う校長として活躍されている大野実さんに「自信を育む子育て」について、お話を聞くことができました。

大人にとっていい子であることが求められ、時代が求めているスピードに感受性豊かな子どもたちは、生きづらさを感じています。「大人は子どもを一面ではなく多面的に評価してあげることで、子どもを丸ごと認めてあげることの大切さや、その子どもの持つ感性に共感すること、体験を増やし失敗を許すことが必要です。」とお話しして下さいました。



また、「自分のことを大切に思う人がいてくれる。親、地域、学校の縦、横、ななめの関係が子どもたちを育てます。

“命を大切に！”ではなく“あなたが大切！”と言ってほしい。”という大野先生の言葉は参加者たちの心の中に響き渡りました。



●【プログラム3】 【分科会】

◆分科会1

「支援するってどんなこと？ 拠点に求められる役割とは？」



コーディネーター

練馬区光が丘子ども家庭支援センター
所長 新澤拓治さん



パネリスト

長野県ふじみ子育てネットワーク
代表 松下妙子さん



パネリスト

蕪崎市子育て支援センター主査
清水智恵子さん

清水智恵子さんの勤務される蕪崎市地域子育て支援センターは、八ヶ岳や富士山など自然が豊かな地域で、若者が地元で定着する都市を目指しています。子育てがしやすいように、行政も積極的にサポートを行っており、事例として家にこもりがちな人に声をかけて人形劇鑑賞を実施したり、機関紙を配布するなど、地域のニーズにあわせた交流を進めています。

松下妙子さんは、子育てひろばの活動を始められて4年目になります。子育て力のサポート、人間の本当の暮らしとは何かを考えるために、おさんぽ隊で外歩きをして子どもをのびのび自然の中で育てる大切さを伝えたり、火を焚いて食べ物を作る、土手を転がる、自分で這い上がるなど、大自然の中で人間らしく生きる喜びを親子で体験する活動もされています。

拠点に求められる役割には、お母さん同士のつながりと親の力が発揮できるよう働きかけることもあります。育児・出産に不安を持たず、母親に心の安らぎを与えられるようみんなで力を出し合うことが大切であり、利用者をお客さんにしないために、共に学び、共に遊び、共に考え、支えあい、心から安心して過ごせる場所の提供、実家に帰ったような安寧な場所にすることが、心と体の調和がとれた親子支援につながるといったことが話されました。



◆分科会2「パパの力！異世代の力！地域の力！」



コーディネーター
笛吹市青少年育成コーディネーター
丸山嶺男さん



パネリスト
NPO 法人市民活動情報センター・
ハンズオン埼玉
常務理事 西川 正さん



パネリスト
南アルプス市青少年児童センター南風
主査 栢原勝みさん



パネリスト
NPO 法人ふれあいの家おばちゃんち
代表理事 渡辺美恵子さん

父親の視点から考える子育て支援とは？異年齢や異世代の取り組み、地域が持つ色々な可能性について西川さん、栢原さん、渡辺さんにそれぞれ事例報告をしていただき、その後参加者の質疑応答になりました。

西川さんからは‘愛とゆる’で社会変革を目指し、コミュニティのコミュニケーションを変えることをテーマに父親の育児参加について事例報告をしていただきました。

休日の公園で、遊んでいる子供とつまらなさそうな疲れたお父さんをよく見かけます。そんなお父さん達にも子育てを楽しむ仲間ができて、お父さん同士のつながりができたら、もっと子育てに参加でき楽しめるのではないのでしょうか？

西川さんは、お父さん達が最初から一緒に企画し会場ごとに枝や枯葉拾いから、場所、金銭面、知恵も各自でだしあう「お父さんの焼き芋タイム」キャンペーンを実施されています。それを機会に交流も深まり、更には、地域力も膨らんでいきます。

また、親同士の交流が深まることによって子ども達同士のかかわり方も変わり、子供の自由も保障できるようになります。例えば、もし何か事件が起きた時でも個人情報交換できる関係ができていれば‘ゆるす’ことができる関わりになるといったことが話されました。

一回のイベントの定員を設けたり事前打ち合わせは敢えて実施していないので、その場で今まで見えなかった人の性格や特技を知ることができたり、そこから交流も生まれてくるそうです。



栃原さんからは‘今、児童館に求められる力’—こどもたちの居場所と地域力—と題して事例報告をしていただきました。ここでの児童館とは、子供たちが遊びを通して、ものづくりや仲間作りの能力を養うなど、豊かな感性を育む場として、子育て中の家庭への支援機能にも配慮した複合型施設のことを指します。南アルプス市には4つの児童館があり、中高生の居場所づくりとして音楽スタジオやビデオ鑑賞室なども完備し、遊びの場としても集えるようなところもあります。高校生がライブを自ら企画して多くの学生が参加するほか、参加した学生がセンター祭りなどのボランティアスタッフとしても参加してくれるなど、幅広い年齢層での取り組みができています。また、地域の力も活発で母親クラブの活動も多くなってきています。今後は、地域の方々と協働のパートナーとなり、活動評価もともに検証していきたいとのこと。

渡辺さんからは‘こどもが育む「ひと・まち・くらし」と題して事例報告をしていただきました。縁側で異世代が集えるような場の提供を目指し始めたおばちゃんちの活動です。スロー、セーフティー、スレンダーの経営方針に基づき「システムにのらない、民だからできる、しごとをする」を心がけ（1）つどう（2）あずかる（3）学ぶ（4）つくる（5）つなげる、の5つの事業を展開。手作りおやつを食べて和む会や、一杯100円のコーヒーが飲める「コミュニティーカフェ」、情報交換の場がある「つどいの広場」、利用者が利用しやすいように利用理由を問わない預かり保育や保育サポーター派遣事業の「あずかりの広場」、育児中のお母さん対象の講座や保育サポーター養成講座、サークルの立ち上げ支援なども実施する「まなびの広場」。また、一人の思いも無駄にせず受け入れ、その企画を実現できるように学び、実践する、「きかくの広場」、また、子育て、子育てにやさしいまちづくりネットワーク会議を年2回開催し、区などの行政も巻き込んだの支援をおこなっている、「つながりあいの広場」があります。最後におばちゃんちのおばちゃんは無償を原則とした活動に喜びを感じられる人を前提に 1、優しい笑顔 2、気軽な声かけ 3、まっすぐな気持ちでお付き合いを心がけて星の数ほどの隣のおばちゃんを目指して活動されています。

Q：今のチャンスをつかみとった年齢は何歳ですか？

A：45歳からカウンセリングの勉強をはじめ、途中介護などもありましたが旺盛な好奇心によりNPO法人を立ち上げました。

Q：どんな体制からスタートしましたか？

A：無償で8名からスタートしました。みんな仕事を持っていたので日曜日の開催から始まりました。

Q：行政と上手に付き合う方法はなんですか？

A：公務員との業務協力は必要です。対個人として付き合うことで人と人とのつながりが生まれ、困難な事例がでてきて良い知恵をだしてくれます。

行政の参加者の意見：行政も子育て支援をおこないたいと考えていますが意見を聞く場が少ないように思います。子育て中のお母さんから生の声を聞いたりしながら、お互いに意見交換を行いたいと思いました。

男性参加者の意見：お父さんもなにかしたいと思っているはずですが、なかなかそういう場に自ら進んで出て行きにくいので、なにかきっかけをつくってくれると、とても助かります。

◆分科会3 「行政と子育て支援拠点の連携・協働のあり方について」



コーディネーター
NPO 法人せたがや子育てネット
代表理事 松田妙子さん



パネリスト
山梨県保健福祉部児童家庭課
子育て支援担当 水口純一さん



パネリスト
NPO 法人子育てさぼーとハーモニー
副理事長 石田尚美さん



パネリスト
NPO 法人 Happy Space ゆうゆうゆう
理事長 星合深妃さん

コーディネーターの松田さんから、「今日の分科会は、はじめの一步と気楽に考えて討論しましょう。そして、それぞれの立場を変えて子育てについて一緒に考える機会にしていきたいと思います」と話されました。

その後、水口さん、石田さん、星合さんの3人のパネリストのお話を受けて、各グループでワークショップを行い、3人のお話からキーワードやそれぞれの悩みなどを出し合いました。

まず、NPO 立ち上げにあたっては、一緒に活動し、志を同じくする仲間がいる事が大事なことや、NPO の活動を長くしていくなかで、行政からも信頼や評価が得られるようになったことが話されました。

行政に対しては、自分達の思いを粘り強く根気よく届けるよう努力すること、その際には自分達だけでなく、まわりにも呼びかけて行動する大切さも出されました。その思いを受け止めての行政の側からは、NPO の活動が地域の大勢のお母さんに還元されるような活動を求めたいと話されました。

また、「協働」というのは、相手は必ずしも行政だけでなく他分野で活動している様々な NPO と連携していくことも大切だということが確認されました。

今後の「協働活動」のありかたとして大事な点は、お互いに信頼しあうこと、熱意をもってお互いを知り合う、交流の場をもつことなどがあります。そして最後に星合さんから、「私たちの活動は地域の問題や課題を解決する使命も持っています。ひろばは、地域づくり、まちづくりにもつながります。」と印象的なまとめの発言で終わりました。



●【プログラム4】【全体会】「これからの山梨の子育て支援」



コーディネーター
NPO 法人びーのびーの 理事長
奥山千鶴子さん



パネリストの方々
(左から新澤さん、丸山さん、松田さん、星合さん)

コーディネーター

NPO 法人びーのびーの理事長 奥山千鶴子さん

パネリスト

練馬区光が丘こども家庭支援センター所長 新澤拓治さん

笛吹市青少年育成コーディネーター 丸山嶺男さん

NPO 法人せたがや子育てネット代表理事 松田妙子さん

NPO 法人 Happy Space ゆうゆうゆう理事長 星合深妃さん



まとめとして各分科会を担当されたコーディネーターの方々から報告をしていただき、参加者全体で情報を共有しました。新澤先生からは、来ている方をお客さんにしないことが重要であることや、ひろば型とセンター型の具体的な内容を聞かせていただきました。その後、グループに分かれてディスカッションが実施され、初めての親子がスタッフとまずつながることが大切な始めの一步だということなど、大変有意義な話し合いの時間となりました。

丸山さんからは、今の父親のあり方は孤独になりがちで横のつながりが少ない傾向がある中、西川さんの“お父さんのやきいもタイム”のような素敵なアイデアがあること、また、自立と孤立の違いを地域全体で理解してあらゆる角度から支援していく必要性を話されました。松田さんからは、社会のスピードを緩めることは大変だが、ぜひ親時間を作って欲しいということや、おやじ感を楽しむことの大切さをお話してくださいました。また、気持ちの敷居を下げることで（安心の場、空気）の大切さを分かち合え、目に見えない価値を見出すには、行政と拠点の連携も不可欠であるというお話がありました。

まとめとして奥山さんからは、子育て支援活動は一人ひとりが、ちょっとした思いやりを行動に移すことで子どもたちや子育てにやさしい社会にできる草の根活動であること、これからの山梨の子育て支援は、親や子ども達のニーズを知り、集う場を持つ意味を十分理解し、地域の関係者とともに考えながら進めていくものだという意見が出されました。

そして、星合さんから、地域で共に育ち合う子育て環境づくりと子どもたちの居場所づくりを行政、企業と一緒に力を合わせて行っていくことが大切であるというまとめの言葉で締めくくられました。